

『上野恩賜公園日本美術館構想』

- 東京国立博物館既存施設群改修及び上野公園への拡張計画 -

指導：佐藤光彦 准教授

M7006 一條真人



0. はじめに

上野恩賜公園内の東京国立博物館は、明治 15 年に誕生し 150 年の歴史を持つ日本最古の博物館であり、開館以来、日本の歴史・文化を伝える重要かつ中心的な博物館施設であった。しかし、近年の芸術を取り巻く環境の急激な変化・文化の多様化により、大きな変革期を迎えている。経年変化・機能的問題や、教育機能の不足など新しい時代に対応した施設とは言いがたい状態である。

また、上野恩賜公園には、様々な文化施設が存在し、芸術・文化の集合地帯となっている。広大な公園の中に、周辺環境に溶け込む様に多数の文化施設が点在している現状は非常に魅力的であり、世界的に見ても貴重な地域である。しかし、現在それぞれの施設群は、単体として存在しており、各館の連携は非常に弱い状態である。

そこで、上野公園内の中心的施設である東京国立博物館を改修・拡張し、日本美術を『歴史として学ぶ』のではなく『美術として鑑賞する』ことの出来る美術館へと変容させ、拡張する際に周辺施設との動線・ランドスケープ等を再構築することで、他施設群との連携を強め、上野公園全体を世界に誇る文化芸術地域とする。

1. 計画の背景

1-1. 上野公園内博物館群の可能性と問題点

公園内には美術博物館を始め、国内を代表する数多くの歴史的建物や、様々な文化施設が点在している。これ程までに、豊かな自然環境の中に文化施設群が点在し、集合している文化地域は世界の中でも珍しい場所といえ、上野公園の大きな特徴である。しかし、公園全体を整備する全体計画が無い為、動線の不明解さ・看板等による景観悪化・鬱蒼と茂った未整備地帯など多くの問題を抱えている。

また、公園内を走っている国道や、噴水周辺部の未整備地帯などで、公園がいくつかに分断されていることにより公園全体のまとまりに欠け、上野公園の持っている特徴が活かしきれていない現状にある。



fig:1 上野公園全体図



fig:2 国道によって分断された上野公園

1-2. 東京国立博物館の抱える諸問題

1-2-1. 東京国立博物館の面積不足

東京国立博物館は、国内で最も規模の大きい博物館施設の 1 つである。しかし、既存博物館群の連携が取れて無く、また面積構成も現代の博物館施設に適していない。

現在東京国立博物館の展示部門は延床面積の 32% 程度を占めているにも関わらず、収蔵部門は 11% しか無く、館としてのバランスが悪く、また、サービス部門は 10% 未満と、利用者の満足からはほど遠い状態である。

この面積不足が、様々な問題の根本的原因であり、抜本的改革が必要である。

	展示面積	収蔵庫	ラウンジ*	カフェ	教育部門	管理運営	延床面積
本館	6402 m ²	3754 m ²	346 m ²	0 m ²	0 m ²	0 m ²	22416 m ²
表慶館	1182 m ²	0 m ²	154 m ²	0 m ²	0 m ²	0 m ²	2049 m ²
東洋館	4754 m ²	639 m ²	204 m ²	384 m ²	0 m ²	486 m ²	12531 m ²
宝物館	1462 m ²	292 m ²	203 m ²	140 m ²	156 m ²	262 m ²	3959 m ²
平成館	4554 m ²	2120 m ²	691 m ²	0 m ²	1044 m ²	1395 m ²	17997 m ²
合計	18354 m ²	6805 m ²	1597 m ²	524 m ²	1200 m ²	2143 m ²	58952 m ²
割合	31.1%	11.5%		9.2%			100%

fig:3 東京国立博物館面積構成

1-2-2. 過剰展示及び単調な展示計画

東京国立博物館の面積不足により、展示面積に対して展示物が過剰に密集した空間となっている。そのため、バックヤードを展示室にするなど、健全な展示空間が確保されているとはいえない。

展示計画全体としても、『美術を鑑賞する』ことより、『歴史を学ぶ』という側面が強くなり、日本美術を『美術』としてでなく『歴史展示物』として扱っている状況である。

また、日本美術は展示物によって、展示空間のスケールや、環境が大きく異なるべきである。しかし、現状の本館においては、どの展示物も似た様な展示方法であり日本美術や建築に見られる様な周辺環境との豊かな関係は見られない。



fig:4 展示室現状

1-2-3. 既存博施設群の利用課題

表慶館は、明治 41 年に完成した片山東熊設計の様式建築である。階段などの細部の装飾まで凝った、明るく華やかで壮麗な建物で明治末期の洋風建築を代表する施設である。しかし、現在は年に 1 回程度の企画展示を行う以外は使われていない現状にある。

また、東京国立博物館に併設されている、資料館は、和・漢・洋図書約 20 万冊、写真原板約 30 万枚、など多くの美術専門図書を備え、日本でも有数の美術専門図書機能であるにも関わらず、博物館側からのアクセスもできず、博物館と一体的な施設となっていない。

1-2-4. 既存外部空間との断絶

展示空間に囲まれる中庭空間や、裏手にある日本庭園など、豊富な外部空間を持っているが、現在はそれらと断絶し、未利用状態にある。

また、裏の日本庭園には「応挙館」「九条館」などの茶室もあり、日本美術の屋外展示として活用できるが、この日本庭園もほとんど利用されていない現状にある。



fig:5 日本庭園及び応挙館

1-3. 学芸員育成の必要性

日本の学芸員は専門職務以外の雑務が多く、学芸員を取り巻く環境は、欧米諸国に比べ学術的・社会的にも劣っているとされている。また、日本の中心的博物館である東京国立博物館は学芸員教育に協力的では無い。ナショナルミュージアムとして整備するには、学芸員教育機能の強化と共に、広く一般に公開することが必要である。

館名	常勤職員	学芸員及び教育専門職員
ルーブル美術館	1600人	学芸員65人(補助100人) 教育120人
大英博物館	1030人	学芸員120人 教育30人
ベルリン国立博物館群	1400人(内民間委託職員350人)	学芸員240人 教育25人
メトロポリタン美術館	1800人	学芸員110人 教育80人
東京国立博物館	118人	50人
京都国立博物館	44人	16人

fig.6 博物館人員規模概要数比較 (*『美術館の可能性』より引用)

2. 計画の目的

『上野恩賜公園日本美術館』の構築

東京国立博物館を改修・拡張し、日本美術を『歴史として学ぶ』のではなく『美術として鑑賞する』ことの出来る美術館へと変容させ、日本を代表する日本美術館とする。

また、公園内施設群の連携を強化することで、公園の豊かな自然環境の中に様々な美術館・文化施設が点在し、公園全体を大きな1つの文化芸術地域として捉えることが出来るようにする。

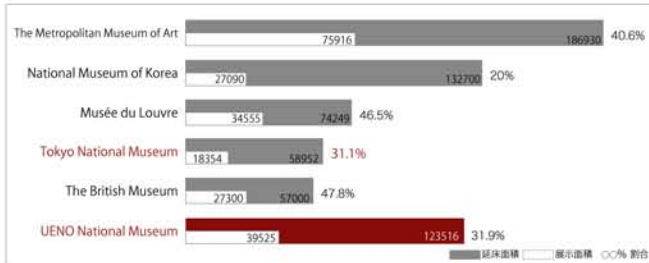


fig.7 海外主要大型美術館との面積比較

2-1. 上野公園との分断の解消

公園を東西に横断する国道や、噴水周辺部の未整備地帯によって、生まれた上野公園の分断を解消し、他文化施設群と一体となった文化芸術地域を生み出す。

- ・公園から繋がるアプローチの新設
- ・サービス機能を備えたホワイエ空間の新設
- ・噴水周辺部を中心としたランドスケープデザイン

2-2. 東京国立博物館 改築計画

公園内最古の博物館であり、上野公園の中核を担うべき東京国立博物館の抱えている問題を解決する為に改修を行う。各時代の建築様式と嗜好を如実に反映している各館の持つ正面性を崩さない様にすると共に、周辺の豊かな環境との接続をはかる。また、近年博物館に強く求められる教育普及部門を強化する事で、ナショナルミュージアムとしての役割を明確にする。



fig.8 既存国立博物館正面性

2-3. 東京国立博物館 拡張計画

既存の日本美術の展示空間を再構成し、日本美術展示の為の新館を設計する。

本来の日本美術と自然との豊かな関係に注目し、自然環境と日本美術・建築の新しい関係を構築する。また、展示物の分類・展示方法を含め再構成し、日本美術にふさわしい展示が行える様に計画する。

3. プログラム

東京国立博物館自身の、不足機能を補うと共に、公園内周辺施設の機能を補完し、『上野恩賜公園日本美術館』の中核を担う施設となる為のプログラムを選定する。

- 改修部
 - 教育・学習機能 (図書機能)
 - ・学習スペース (レクチャールーム)
 - ・図書閲覧室/図書情報検索コーナー
 - ・保存書庫
 - 学芸員教育機能
 - ・修復室 (簡易的な保存修復) / 研究作業室
 - ・保管庫/一時保管庫
 - ・学芸員室/会議室
 - ・講義室
 - 展示機能
 - ・古文書展示
- 拡張部
 - 展示機能
 - ・常設展示 (日本美術展示) / 企画展示
 - 保管機能
 - ・収蔵庫/一時保管庫
 - サービス機能
 - ・ミュージアムショップ/アートショップ
 - ・ブックショップ
 - ・アートサロン
 - ・レストラン/カフェ
 - ・レストスペース

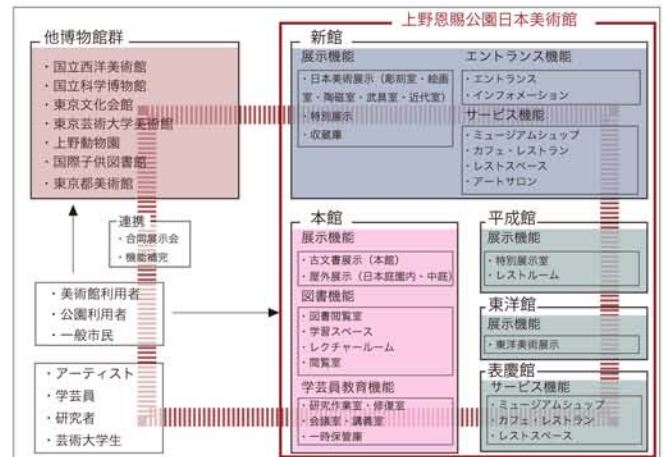


fig.9 プログラムダイアグラム

4. 計画敷地

現東京国立博物館敷地及び公園内噴水周辺



*現在、都市計画公園と成っている、噴水周辺敷地を東京国立博物館敷地とし、一体的に計画する。その際、噴水周辺の用途地域等の規制は、東京国立博物館内の規制に従う物とする。

5. 設計概要

5-1. 東京国立博物館の機能整理及び拡張

現在、東京国立博物館各館は、それぞれの機能がバラバラに構成されている為、機能重複・機能不全を起こしている。そこで、東京国立博物館に求められているそれぞれの機能を整理し、全体計画及び拡張の計画を行う。



fig. 10 機能ダイアグラム

5-2. アプローチ及びホワイエの新設

国道によって分断されている既存博物館と公園を、既存噴水周辺部分に新設したスロープによってつなぎ、新たなアプローチ空間を作る。



fig.11 新設されたアプローチ

また、新アプローチに接続された既存博物館の前庭地下に新たなホワイエ空間を新設し、スロープ上に展開されたスカルプチャーコートと、東洋館地下一階のスカルプチャーガーデンと接続する。

5-3. 既存東京国立博物館の改修

5-3-1. 本館と平成館の接続

現在の本館と平成館を繋いでいる接続部を改修し、本館と平成館を一体的な施設として利用する為のガラスコリドーを新設する。また、このガラスコリドーが新たな平成館のファサードとなる。



fig.12 接続部及び平成館新エントランス

5-3-2. 新たな入れ子空間の挿入

現在、階高 7000mm 以上ある既存展示空間に、新たな空間を挿入することで、図書機能スペース・古文書展示スペースを創出する。その事で、既存の開口を利用し、外部空間と一体と成った入れ子空間を生み出す事ができる。



fig.13 本館断面図

5-3-3. 減築による外部空間との接続

現在事務室を展示空間としている本館北側部分を減築し、裏の日本庭園及び中庭空間と接続し、ガラスコリドーの一部としてリーディングルームなどのアクティビティスペースとする。

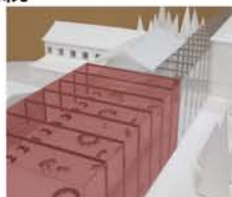


fig.14 減築により生まれた新たな空間

5-4. 日本美術館の新設

5-4-1. ランドスケープと建築の融合

既存の豊かな自然環境に最大限配慮し、既存の樹木を残す様に地下空間を新設する。また、現在未整備地帯となっている噴水両側部分の整備をすることによって、公園全体を回遊しながら、アートを楽しむ事ができるようになると共に、周辺の博物館群との動線を整備する。

5-4-2. ランドスケープとアートの融合

日本美術の本来の、自然環境と美術との関係を再構築し、自然の微妙な移ろいや外部空間を展示空間内に貫きさせることで、ランドスケープに融合する日本美術及び建築空間を構成する。



fig.15 外部と繋がる展示室

美術品の管理・保護に細心の注意を払いながら、展示空間の明暗を創り出し、変化に富んだ展示空間を作り出す。

5-4-3. スケールの変化による展示空間の演出

地上のランドスケープとの関係や、美術品のスケールに合わせて大きささまざまな展示空間を構成する。その事により、ただ単調に続いた展示空間ではなく、美術品のスケールから導き出された、ヒューマンスケールの展示空間や、ダイナミックな展示空間の連続性により美術品との豊かな関係性が構成される。



fig.16 様々なスケールの展示空間

5-4-4. 環境設備計画・搬入管理計画

日本美術は光・湿度などの外的要因に非常に繊細なので、細心の配慮をし展示空間の環境を構成する。ガラスボリューム外壁の合せガラス中空層は、太陽熱によって暖められた空気を冬場は蓄え、夏場は抜く事で、展示空間の環境を一定に保つ。また、内側の紫外線カットの中間膜を挟み込

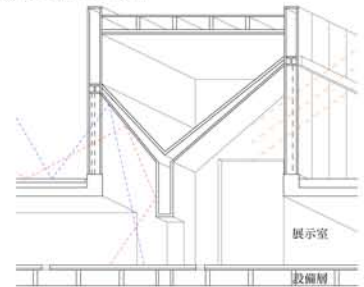


fig.17 「Y字壁」空間ダイアグラム

んだ合せガラスや、内部に設置されたスクリーンにより直射日光を柔らかい光に変え展示空間内に落とし込む。

また、ガラスボリューム内部に挿入された『Y字壁』は壁につたわせた光を展示空間内部に落とし込むと共に、ボリューム自身を支える構造及び、設備装置としても使われる。

美術品の搬入に関しては、既存の東京都美術館の搬入経路を用いることで効率的かつ合理的な搬入が出来るようになる。

5-5. 公園全体の及ぶランドスケープ

既存の樹木及びバスを出来る限り残り、公園内に挿入されるアート・ガラスボリュームの回りを散策することの出来るバスを整備する。

そのことにより、公園全体がアート・建築・ランドスケープが融合した『上野恩賜公園日本美術館』となる。



fig.18 ランドスケープデザイン

